世界平和記念聖堂　献堂５０周年ニュース（　vol.1 No.５　６月号）

「祈りと平和」

「こころを一つに平和を宣べ伝えよう」

世界平和記念聖堂献堂５０周年実行委員会　常任委員会

＜ 目 次 ＞

１．お知らせ

●「平和の歌」募集 ……２

●平和記念聖堂巡礼団の第１号（笠岡教会） ……２

２．聖堂建設の歴史シリーズ

●シッファー神父の「ヒロシマその後」 ……３

３．「ラッサール神父」の思い出

●ラッサール神父の社会事業 ……５

●あの時この時（ラッサール神父の写真）……６

４．「献堂５０周年を迎える祈り」

●今月の祈り ……７

５．資料紹介

●「被爆５０周年　図説戦後広島市史ＣＤ」 ……８

６．部会だより

＜霊性・典礼部会＞ ……８

＜平和活動部会＞

＜記念誌部会＞

「子供の一人を受け入れるものは、わたしを受け入れる。」

＜写真左＞

「光の園」のシスターと子供たち、1948 年祇園三菱重工広島製作所の一画から基町１番地に移転。多くの幼い戦災孤児を育てた。

現在は、社会福祉法人として廿日市市地御前で児童養護施設、ケアハウスを運営。

※被爆５０周年写真集「ヒロシマの記録」（中国新聞社）より

＜写真右＞

ガレキの中の「チースリク神父と日曜学校の生徒たち」（1946 年八丁堀）

※被爆５０周年図説戦後広島市史「街と暮らしの５０年」より

■お知らせ

「平和の歌」を募集

世界平和記念聖堂献堂５０周年にあたり『世界の友愛と平和』を熱望し、献堂に情熱を注がれたラッサール神父の遺志を思い起こし、歌を通して平和の実現を呼び掛けるため、『平和の歌』を募集します。世代を超えて歌い継がれる作品をお待ちしています。

≪　募集要項　≫

■応募作品のテーマ：「平和」
■応募資格：特に制限しない。
■応募方法：
　○「作詞・作曲された歌の歌詞と楽譜」及び「歌を録音したテープまたはＣＤ」とします。
　○グループでの応募も可能です。
　○作品は、何点でも応募できます。
　○作品名、住所、氏名（ふりがな）、年齢、電話番号を記入した用紙を同封してください。
　○応募作品は未発表のものに限ります。
■応募の締切り：平成１６年１０月１０日（必着）
■審査発表：
　○最優秀作１点、優秀作数点を選び、それぞれ賞を贈呈します。なお、参加賞を贈呈します。
　○平成１６年１２月２４日　世界平和記念聖堂において、作品の審査発表を行います。
■作品の著作権等：
　○応募作品の著作権は、カトリック広島司教区に帰属し、応募作品は返却しません。
■提出先：下記に郵送または持参。
　カトリック広島司教区　「平和の歌募集」係
　〒730-0016　広島市中区幟町４－４２
■お問合せ　（０８２）－２２１－６０１７

平和記念聖堂巡礼団の第１号

　献堂５０周年実行委員会では、世界平和記念聖堂への巡礼を呼びかけています。これは、「この聖堂を訪れ、ご覧になるすべての方々は、亡くなられた犠牲者の永遠の安息と人類相互の恒久の平安のためにお祈りください」との献堂記の呼びかけに応える

ものです。早速、この呼びかけに応えていただいたのは、「笠岡教会」の皆さんでした。５月９日の主日のミサを笠岡教会のスメット主任司祭の司式で幟町教会の人々とともに捧げました。スメット神父は、説教で「キリストの平和を学ぶために巡礼に来たこと、建物はいつか朽ちるが、永遠の平和は、この日朗読されたヨハネ福音書の『あなたがたに新しい掟を与える、互いに愛し合いなさい。』というイエスの願いを思い起こし、仲むつまじく生きることからはじまること、憲法９条を大切にすることなど」を話されました。ミサの後は、記念聖堂を見学。途中、パイプオルガンの伴奏で聖歌を歌い、オルガンの近くで聞く音色に感激された様子でした。当日は、結婚式が予定され、慌ただしい見学になりましたが、８月５日の献堂５０周年記念ミサに、是非もう一度、お越しください。

■平和記念聖堂への巡礼と聖堂の案内を希望される方は、事前に申し込み下さい。申込書は、各小教区に配布するチラシや広島司教区のホームページにあります。記念聖堂で「平和」をお祈り下さい。

＝広島司教区ホームページのアドレス＝
http://www.hiroshima.catholic.jp/

＜聖堂建設の歴史シリーズ＞

1945 年 8 月 6 日の朝、幟町のカトリック教会で被爆した司祭は、ラッサール神父のほか、クラインゾルゲ神父（帰化名　高倉　誠）、チースリク神父、シッファー神父でした。この中で、最も深い傷を負ったのは、シッファー神父で、司祭館の１階の図書室で被爆し、本棚のガラス戸のガラスの破片で、首に大怪我をされました。神父は、一人で縮景園に避難し、その日の夜に長束の修練院からの神父達に救助されました。その後、アメリカに渡り、記念聖堂の募金活動を支援され、健康を回復された後、再来日し、在日アメリカ人の司牧に携われました。ここでは、シッファー神父が 1951 年のカトリック・ダイジェストに掲載された「ヒロシマその後」という文章から、興味深いエピソードを紹介します。なお、伝聞による記述と思われる部分もあり、正確さに欠けるところがあることをお断りします。また、紙幅の関係で文章の一部を省略しています。

◆◆◆

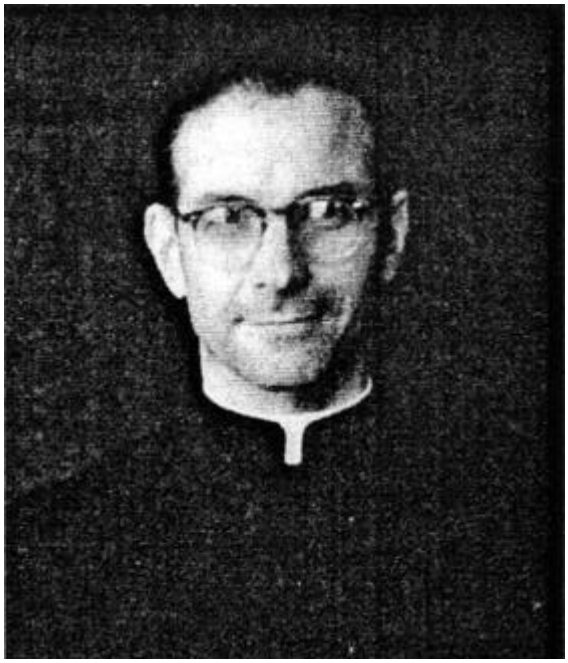
「原子爆弾第一号は、広島のイエズス会の教会から八丁隔たったところで炸裂した。私はその教会の司祭だったので、一つの都市の上に集中的に示された世界の終りの光景をまざまざと見たのである。

ほんの１秒しか掛からないことであった。突然の閃光―背筋を冷す恐怖―そして・・・バーン！　50 万人の住みかであった広島は、突如として、地上から姿を消してしまった。そのあとに残されたものは、暗闇と血と火傷とうめきと火焔ばかり。

一体何事だろう？　誰にも分らなかった。生き残った人々には質問を発するいとまなどはなく、死んでしまった 14 万人にとっては、どうでもよいことであった。（中略）

広島にあったイエズス会管区長フーゴ・ラッサール神父及びその輩下の三人の司祭たちは、いずれも重傷を負っていた。12 時間後には救助されたが、彼らの体は放射線のために弱っており、その傷は数ヶ月後まで直らなかった。彼らは、広島から 3 マイルはなれたイエズス会の修練院で、少しずつ快復して行った。

この修練院もひどく損傷されてはいたが、それでもまだ使用に堪えた。130 人の人々（その多くは火傷又は外傷による重態であった）が、神父たちの手で街中から救いあげられ、その後 6 カ月間ここに収容されていたのであった。



（「フーベルト・シッファー神父」　柳田神父より）

援助修道会（当時は、煉獄援助姉妹会という。1856 年フランスに創立、1935 年来広）は、修道院も持ち物も一切失っていたのではあるが、イエズス会士を助けて、病者の看護にあたった。（中略）

数ヶ月後、管区長と一人の司祭がかって教会であった土地に戻って来た。彼らは、自分たちが住む小さな木造の小屋を建てることから始めた。

2、3 週間のち、彼らは、戸外でミサを献げて、凍りつく広島で、戦後最初のクリスマスを祝った。

その後、ある朝、奇妙なことが起った。仏教の僧侶が三人、ここの司祭たちを訪ねて来たのである。

（「被爆者を運ぶドイツ人神父」図説広島市史より）

はじめ、彼らは、広島を襲ったおそるべき破壊について、20 万の死者について語った。しかし間もなく、訪問者たちは話題をかえた。彼らは、カトリックの典礼の美しさをたたえ、グレゴリオ聖歌が実に好ましいといって司祭たちをびっくりさせ、修道院生活、黙想、祈祷について数多くの質問をしたのである。あげくに、主だった僧侶が尋ねた。

「あなた方司祭や信者は、つまる所、平和のための祈りをお唱えになるおつもりがありますか？」

「ありますとも」

と、ラッサール神父は答えた。「私たちは毎日平和のために祈っていますよ。」

「あの、神父さん、実はこういうわけなのです。私たちは、以前よりはすぐれた新しい広島を建てたいと思っております。しかし、何よりも、人々の心がよりよくならねばなりません。この土地に起った事柄については、誰を責めることもありません。結局の話、この戦争をはじめたのは私たち日本人なのですから。

しかし、私たち広島の残存者は、みな、近代戦の恐しい結果をこの眼で見たのです。私たちは、こういうことが、地球上のどこでも、二度と再び起ってもらいたくありません。」「ところで、あなた方キリスト教徒の人々、それに私たち仏教信者も同様に、平和は「宗教」と「祈り」を抜きに保たれないものであることを知っております。私たちの希望は、原爆の町広島の丁度中央に、たえざる祈祷の記念堂を建てたいということです。私たちは、まだ、あなた方の宗教を十分には存じておりませんが、いつの日か、あなた方カトリック教徒が、私たちの町の中央に、そのような不断の祈りの家を建てることがおできにならないでしょうか？」

二人の司祭は殆んど自分の耳を信じることができなかった。この仏教の町に、カトリックの記念堂？広島は、今までずっと、何百という寺院を有する仏教のとりでだったのである。はげしい反キリスト教的雰囲気が支配していたのだ。それが今、こういう提案がなされるのか？　ゆっくりと、ラッサール神父は尋ねた。

「何故、あなた方仏教徒がそれをお建てにならないのですか？　広島は仏教の町だったのですから。」主だった僧侶は首を横に振った。

「私たちが現在こぞって必要なのは、実際に天に届く祈祷なのです。私はあなた方の聖書を読みました。そして、あなた方の祈祷にも力があることを知っております。それにあなた方カトリック教徒には、跪いて一日中神様に祈りをささげている尼僧があります。私たちが必要としているのは正にそれなのです。私たちは、沢山の、力強い祈祷を必要としているのです。」「若し、私たちカトリック信者が、この記念堂を建てるのでしたら」とラッサール神父は答えた。

「私たちは、それを、聖母マリアの被昇天の聖堂にしたいと思います。キリストの聖母は、天で、いつも私たちのために祈っておられますし、聖母は、ひたすらに、世界の平和を希望しておられるのですから。」「それはもう願ってもないことです」と僧侶たちは答えた。「この世界には、母親の心にまさって平和を象徴し得るものはありませんでしょう。

どうぞ、神父さん、このことをお考え下さって、できるだけのことをなさって下さい。」

（中略）

（「聖堂の建設現場を訪れた仏教関係者」　幟町教会より）

1949 年 5 月 11 日に、日本の国会は、特別な法令を発し、広島を精神的・文化的中心として再建さるべき「平和の国民的象徴」であると宣言したのである。（註、広島平和記念都市建設法）　ラッサール神父は、世界平和のための聖母記念聖堂で不断の祈りをささげさせるため、聖体礼拝フランシスコ会の修道女たちを広島に招いた。彼女たちは、昼も夜も、一時間ごとに平和のため、生ける又死せる歴戦の兵

士たちのため、また、キリスト教宣布に恩恵を与えた人々のため、ロザリオの祈りを唱えた。

その聖堂には、われわれの平和のために戦った、生ける又死せる歴戦の兵士たちの名前を載せた「黄金の祈祷書」が安置されるはずだ。既にして、親戚友人から、11 カ国にわたる 4300 人の兵士たちの名前が送付されている。過去 3 年間に、広島代牧区のカトリック人口は 7 割 5 分の増加を示した。

1948 年には、3 日間にわたって、16,000 人の仏教徒が、広島で、はじめてカトリック映画を見たのであった。この映画をとりはからったのは、聖ヴインセンチオ・ア・パウロ会であった。1949 年、宣教師たちが講演した広島のカトリック講座の出席者は、総数 32,000 人を数えた。1950 年には、広島近在の仏僧 8,000 名が、司祭にカトリシズムに関する講話をしてもらいたいと依頼して来た。

1 カ月前に、私は、広島から来た二人の日本人修道女と共に、広島からの贈呈品をワシントン市の大司教に献呈することができた。広島の市長及び議会は、アメリカに対する善意と感謝のしるしとして、十字架を贈ったのである。この十字架は実際一つの象徴であった。それは、有名な仏閣国泰寺の境内にかって立っていた樹令 400 年の樟（くす）の巨木を用いて彫刻されたものだからである。この巨木が原爆で死に果ててから、その木材が、復活と信仰と祈祷との象徴を刻むために用いられたものであった。

広島の平和記念聖堂は目下建築中である。1950 年 8 月 6 日午前 8 時 15 分、最初の原子爆弾炸裂後丁度 5 年目に、一人の日本人イエズス会士（荻原晃神父）がその礎石を祝別したのであった。

広島は、1952 年 8 月 15 日[a]に於けるこの記念聖堂の壮厳な献堂式を待望している。

（後略）

≪カトリックダイジェスト／America 誌≫
1961 年 3 月号　第 4 巻　第三号より
（宣教１００周年記念誌原稿に掲載。）

(a)工事延期により、実際には、1954 年 8 月 6 日に献堂式を迎えた。

＜ラッサール神父の思い出　＞

ラッサール神父は、社会事業にも熱意を持って働かれました。東京でセツルメントを創立したほか広島でも、この方面で多く活動されました。神父の部屋の戸棚は、社会事業に関する書籍で一杯だったとチースリク神父は回想されています。

ラッサール神父は、1929 年来日後、1931 年には、東京都荒川区三河島の貧民街に上智セツルメントを設けられました。昭和３８年に刊行された上智大学５０周年誌に次のような記録があります。

「カトリックの慈善事業の一環として計画されたものだが、上智の学生が社会奉仕を行なう絶好の場でもあった。大学でも教鞭をとられ、アロイジオ塾[b]の舎監でもあったラッサール師がこの施設の中心であり、貧しい人びとの厚生のために全力をつくされた。開設当初はむろんごく小規模なものであったが、ラッサール師は上智の学生二名とともにそこに起居され、両親が出稼ぎに出たあとの貧しい子供たちの面倒をみた。学生は子供を相手に遊んだり勉強の手伝いをしたり、神さまの話などをした。またこのような貧民街では、保健衛生の面でも、なすべきことは沢山あった。

最初のクリスマスの集いは大成功であった。そのころ、まだ神学生であったハンス・ヘルヴュブク師が子供たちを喜ばせるため、自動車にチェロやヴァイオリンやギターを積みこんで出かけた。

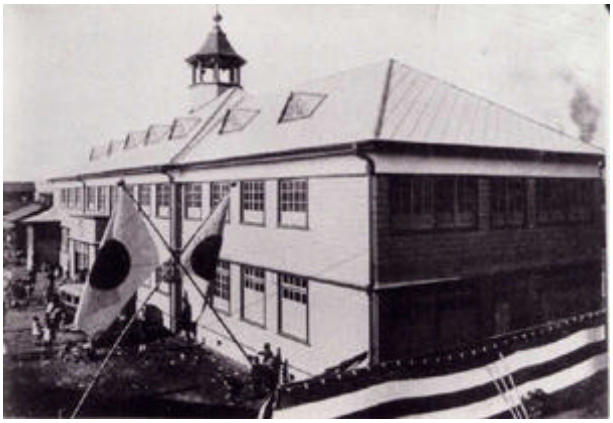
（開設当初のセツルメント／上智大学５０周年史より）

バラック建ての広間には飾り付けがすでにされ、クリスマス・ツリーが輝き、足の踏み場もないほど大ぜいの子供がここを埋めていた。およそ三百人くらいだったであろう。その重みに堪えかねて粗末な床はぬけてしまった。さいわい怪我人はなかった、などというエピソードもある。

1938 年（昭和 13 年）12 月、ラッサール師のあとを、アロイジウス・ミヘル師がうけつぎ、現在まで 25 年間この仕事と取り組んでおられる。」

また、先の講演会でも、ルーメル神父は、上智セツルメントに触れ、次のように話されています。

「これは 1934 年の上智カトリックセツルメントです。彼が活躍して寄付を集めたりして立派に作ったものです。後になって政府に怪しいといわれ、カトリックという字は消したんです。このカトリックセツルメントは現在も存続(c)しています。80 床の老人施設と 50 床の病院、80 床の特別養護老人ホームがあります。素晴らしい大きなカトリックの社会福祉事業です。今も上智セツルメントという名前になっています。僕もそこで 2 年間ばかり理事長を務めたことがあります。」



（新築されたセツルメント／ルーメル神父講演会より）

広島におけるラッサール神父の社会事業への働きは、1941 年 4 月の聖母幼稚園の開設にも実りをもたらしました。幼稚園は、当初、木造の聖堂内の伝道場の一部を使って、「聖母園」と称して開園された。最初の卒園生は 18 名で、東京のセツルメントから森博子さんと伊牟田育子さんの二人を招いて、運営にあたられた。（チースリク神父の思い出）

原爆により、この二人の先生も被爆され、長束に避難されました。1946 年 4 月クラインゾルゲ神父により「聖母園」が再開され、1949 年の園長エミール・キリシェル神父の時に「聖母幼稚園」として正式に認可された。園舎は、記念聖堂の建築の際に、エリザベト音楽大学本館あたりのところから、現在地に移転しました。

(b)「アロイジオ塾」は、上智大学の学生寄宿舎で、イエズス会の聖人アロイジオ（貞潔の徳をもって有名で、青年の保護聖人）にちなんで命名。新築後初代の舎監がラッサール神父で、学生の指導にあたられた。なお、初期には、広島教区長をされた萩原晃師、聖書研究の大家渋谷治師、元上智大学長大泉孝師もここで若き日をすごされた。

(c) 1955 年 8 月社会福祉法人上智社会事業団「上智厚生会館」となり、1962 年 11 月新館が落成している。

【 あの時・この時 】

ご提供いただきました資料の中から、ラッサール神父の人となりが偲ばれる写真を紹介させていただきます。今後も、資料の提供をお願いします。

（呉教会の長谷川神父のご母堂とラッサール神父）

＝幟町教会　武田　孝さん提供＝

（司教公式訪問時のラッサール神父／昭和 43 年 5 月）

＝翠町教会　今村　宏さん提供＝

■世界平和記念聖堂献堂５０周年を迎える祈り

【今月の祈り】

◆６月の意向

「ケルンと広島、同じ苦しみに結ばれつつ、世界平和のために共に働き、共に祈る。」　（パイプオルガン銘文）

ベルリンもケルンと同じ苦しみを体験しました。ベルリン教区は、故野口司教様が広島司教になられたとき、姉妹縁組みを結びました。第二次大戦後東西に分割され、壁で境界が仕切られ、しかも、西ベルリンは四分割されて、米、英、仏、ソに分割統治されていました。一つの教区が五つの国の支配下にありました。それでもベルリン教区は分裂することなく、一致してこの苦境を乗り越えてきました。そしてそのような苦しい状況の中で、広島教区を援助し、自立するのを助けてくれました。

1983 年 11 月、広島教区信徒の巡礼団が初めてこの地を訪れ、東ベルリンにあったカテドラルで共同ミサを捧げました。

1961 年 8 月以来東西にベルリンを分断していた壁は、1989 年 11 月撤去され、東西ドイツは統合されました。荒れ果てた地、それ以上に打ちひしがれた心は、主なる神が清らかにして、再び昔のような生活ができるようにして下さった。ベルリンと広島は戦争の災禍を受け苦悩しました。

この苦悩の体験によって互いの都市が変わり、真の世界平和都市のシンボルとなりますように。

（ベルリンの壁／斉藤神父より）

（聖書の言葉 ）

主なる神はこう言われる。わたしがお前たちをすべての罪から清める日に、わたしは町々に人を住まわせ、廃墟を建て直す。

荒れ果てた地、そこを通るすべての人に荒れ地と見えていた土地が耕されるようになる。

（エゼキエル書　36・33～34）

（黙想）

（祈り）

主はシオンを慰め
そのすべての廃墟を慰め
荒れ野をエデンの園とし
荒れ地を主の園とされる。（イザヤ 51・3）
どうかわたしたちの罪の災いによって失ったあなたの恵みを、
わたしたちの回心の業によって、回復することができますように。

そして、わたしたちが立ち直るために受けた愛に応える力をお与え下さい。わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

※「今月の祈り」は広島地区センターの斉藤神父が担当しました。

＜あの時・この時＞　―つづき―

（結婚された二人とラッサール神父／昭和 37 年 5 月）
＝幟町教会　鈴木　和子さん提供＝

■資料紹介

●「被爆５０周年　図説戦後広島市史ＣＤ」
―ヒロシマの音楽―“一本の鉛筆があれば”
（広島市企画総務局公文書館　発行）
（本編　1996 年 3 月 31 日初版　第１刷）
＜内容＞
図説広島市史の付録として、ヒロシマ、平和、核廃絶などをテーマとする楽曲の中から選曲された音楽ＣＤである。ここで、昭和 22 年「平和祭」のために公募した作詞に山本秀さんの作曲による「ひろしま平和の歌」が収録されている。毎年、平和記念式典で歌い継がれ、今ではヒロシマを象徴する歌となっている。被爆者として弟を亡くした一人として、平和を希求する気持ちをメロディーにされました。

（山本秀さんとラッサール神父／昭和 59 年３月）
＝幟町教会　武田　孝さん提供＝

■部会報告

＜霊性・典礼部会＞
第６回部会で８月５日の献堂記念ミサの式次第や祈願文、聖書朗読箇所、典礼聖歌、映写スライドなどについて話し合った。６月 19 日に第 7 回部会を開き、典礼のアウトラインをまとめることになった。

＜平和活動部会＞
平和の歌の募集案内を作成し、広島教区内の小教区や教会学校関係者に呼びかけを始めた。平和学習は、第１回目を 7 月 4 日（日）に、平和活動家・森滝春子さんを迎えて講演会を予定し、詳細を調整中。８月初旬を目途に「諸宗教者の平和の祈り」を企画し、関係者との調整を行うこととした。

＜記念誌部会＞
幟町教会にある写真類の確認と年内に発行する記念誌の編集方針について話し合った。写真を中心とした記念誌として編集することとし、記念誌の概算予算を見積もることにした。なお、写真の収集・整理が課題として残された。

＜編集後記＞
・視覚障害者の方々にも「献堂ニュース」を紹介したいという声があります。朗読のボランティアが出来る方は、ご協力下さい。。
・援助修道会のシスター天野から提供されたラッサール神父の黙想指導の資料があります。手書きの原稿をワープロに打ち直し、記録として残したいと思います。ご協力下さい。（Ｋ・Ａ）

献堂５０周年ニュース
vol．01　６月号(No.５)
2004.06.01 発行
（編集・発行）
カトリック広島司教区
世界平和記念聖堂献堂５０周年実行委員会
常任委員会
〒730-0016　広島市中区幟町４番４２号
Tel　０８２－２２１－６０１７
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　http://www.hiroshima catholic.jp/